映画の小箱

マフィアに潜入して任務を遂行するFBIの男。彼を信頼していくマフィアの男。その運命的な2人の出会い。仕事か家族かに揺れ動く男の悩みは共感を誘う。

『フェイク』

生と死を分かつ男たちの過酷な葛藤とドラマ

金丸弘美＝文
text by Hiromi Kanamaru

衝撃的なのは、これが現在のニューヨークで実際にあったことを題材にしているということである。それも一人のFBIがマフィアに接触し、潜入するという、にわかには信じがたいことが行われ、それが実施されたということだ。それだけでも驚嘆に値する。

マフィアというと、華やかなギャングの世界や凄惨な撃ち合いを想像しがちなのだが、ここには華麗さも激しい銃撃戦も登場しない。あるのは、一人のFBIの男と一人のマフィアの男が、たまたま出会ったがゆえに、運命というにはあまりに過酷な、生と死を分かつことになる二人の男の葛藤とドラマである。そこには、生とはなにか、そもそも人はなんのために生き存在するのかという問いかけが、じわりと浮かびあがってくるのである。

物語はブルックリンのあるバーで始まる。革のジャケットを着た、一人の男がカウンターにいる。彼は、FBIの特別捜査のために入のための偽名はドニー・ブラスコ（ジョニー・デップ）である。ブラスコは、宝石の鑑定をしているということになっている。

あるとき、ブラスコは、マフィアの一人レフティ・ルギオーネ（アル・パチーノ）とバーで一緒になる。ルギオーネは、ブラスコが宝石鑑定家だと知って、自分がもっている宝石が鑑定できるかと、ブラスコに宝石を見せた。すると、ブラスコは「これは偽物（フェイク）だ」と答える。

ルギオーネとしては、少々カチンときてしまう。ルギオーネからすれば、自分を誰だと思っているんだというわけだ。しかし、ブラスコは、偽物は偽物と相手にしない。そうこうするうちに、ブラスコはルギオーネとともに、この偽物の宝石を渡した飲食店を経営する男のところへ同行することになる。

そこでルギオーネは、宝石を渡した男に本物か偽物かを迫った。ところがブラスコは相手の男にいきなり殴りかかり、偽物だと決めつけ、宝石の代わりに、相手の車を強引に奪ってくるという行動に出た。

ルギオーネは、大胆な行為に出たブラスコに、一目置く。ルギオーネはブラスコのことをブルックリンの知り合いに聞いて回る。確

かに彼は宝石鑑定家であり、どうやら問題がないらしい。こうしてルギオーネはブラスコに改めて近づき、彼を仲間に入れようとする。ブラスコの接触は見事に成功したというわけだ。

ルギオーネは、マフィアの地区の構成員としては古株だが、幹部でもなんでもない。かつては羽振りのよかったときもあったが、今は構成員の一人として、日々上層部に上納する金をどこからかつくり出していかなければならない。そんなときに知り合った若くて威勢のいいブラスコは、自分の相棒としてもってこいに見えたのだ。

もっともルギオーネは、ブラスコが本当に信用できるか慎重だ。少しずつ接触を重ね、自分と行動を共にできることが分かり始めてから、徐々に仲間に紹介していく。ブラスコもまた、信用を得るために、出すぎた真似はしない。常に一定の距離を置きながら、一歩ずつ相手側に踏み込んでいくのだ。

この互いを探り合う距離が、とてつもないサスペンスを生む。やがて次第に信用を得たブラスコは、一人の構成員の仲間として認められていく。

ブラスコはルギオーネの相棒として行動し、盗聴テープを録り、マフィアの動きをFBIに報告するということを、なんと六年にわたって行うのである。

やがて、時間が経つうちに、ルギオーネはブラスコに絶大な信頼を寄せ、まるで家族のように扱い始める。ブラスコは潜入の間、滅多に自分の家には帰れなくなる。たまに帰ると、妻との口論になってしまう。ブラスコの家庭は崩壊寸前である。ブラスコに葛藤が始まる。仕事に忠実になればなるほど、ルギオーネへの人としてのいとおしさが増し、一方で本当に愛すべき家族を失いそうになる。

揺れ動き、また何度も潜入がばれそうな危機にあいながら、ブラスコは、任務を遂行することになる。

宝石の〝偽物（フェイク）〟の真偽から始まった物語は、そこにルギオーネとの絆と家族という真実と、一方でブラスコの仕事と家族という真実、どちらもかけがえのない、しかし絶対に相いれられない、まるでコインの表裏のような運命を生きた二人を描き出すのだ。♪

『フェイク』
（アメリカ映画）
監督＝マイク・ニューウェル
出演＝ジョニー・デップ／アル・パチーノ／マイケル・マドセン／ブルーノ・カービー／ジェームズ・ルッソ／アン・ヘッシュ
東宝東和配給　10月下旬、日劇プラザほか全国東宝系にて公開。